

沼津市若山牧水記念館

第30号

2003.3.15

編集・発行 沼津牧水会 TEL・FAX (055) 962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

のめといふ飲まなきや一つ書けといふ

これの吉彌はいとしかりけり 牧 酔



と戯歌をしたためている。和山山蘭には、しばしば戯歌を送っている。

アタマハゲケツハイタミテアオニヨシ オホキナオナラ

ヒリオコセカシ

これは、痔を病む山蘭への励ましで、寄書の葉書に書いた歌。

「アタマハゲ」は山蘭の前頭部が禿げあがっていたから。「アオニ

ヨシ」は「オホキナオナラ」の「ナラ」にかか
る枕詞。「ヒリオコセカシ」は「ひつてよこし
てくれ」。すなわち、大きなオナラでもひるよ
うな元気を出せとの意であろう。ユーモアに溢
れている。

「館報」第二十八号で紹介した喜志子夫人宛
の葉書の

たれやらがひとりおこりてひとりなく
ひとりおもへばおもしろきかも

やアやアのやつこらやアのやアなれば
みんなおそれてすくみをるべし

いつそのことどうだまこみこよびつど
へしやつちよこだちでもやらかせやらか

せ

の三首も戯歌の範疇に入ろう。

「…手紙の妙、それよりもハガキの妙、これ
に引き付けられた者は恐らく数限りなくある筈
だ」と歌人の尾山篤二郎は書いている。

そういえば、裾野の鈴木秋灯へのハガキに

モモクヒニ フロシキモチテオリテコイイソガニヤナクナル

ケフアサアサテ

と、庭に実った桃を取りに来いと書いていることを思い出す。

この稿の執筆に当たっては、大悟法利雄氏の遺稿『最後の牧水研
究』（短歌新聞社刊 平成五年）の「牧水とユーモア」を参考に

した。（須永 秀生）

吉彌は浜松市の新瀧乃野屋
の美人芸者で、酒豪であった
らしい。大正七年五月八日、
牧水は近畿地方への旅に出た。
午後三時に浜松に着き、その
夜は近在の会友と伝馬町の花
屋旅館で歌会。この歌は、そ
の歌会の後の宴会の際に三味
線の胴に書いたとされている。
「牧酔」としてるところも面
白い。歌集には載っていない。
牧水はこの歌が気に入った
のか、ある時、襖に筆を振る
つてこの歌を残したようだ。
どういいう経緯で「沼津倶楽
部」の元料理長の赤塚英雄氏
の手元に来たかは不確かだが、
当記念館開館直後の昭和六十
三年三月に氏から寄贈された。

なお、沼津倶楽部は、ミツワ石鹼社長三輪善兵衛氏の別荘として
大正年間に建てられ、戦後、社団法人によって運営されている料
亭で、当記念館の前にある。

ところで、牧水は、この旅の途次、大阪千日前の料亭から東京
の和田山蘭に葉書を出しているが、そこに
浪華渦なにはおきても飲めくと飲む灘酒は飲めど飽かぬかも

俳人・飯田蛇笏との出会い

篠 弘



筆者 近 影

初期における俳人飯田蛇笏との交遊は、あまり知られていない。牧水が「創作」を編集したさい、明治四三年の六、七、八月号の三回にわたって、蛇笏の俳句を掲載する。俳人では、早大時代から親しかった蛇笏だけであった。そのうえ、その九月二日には、山梨県境川の山村に蛇笏を訪ねている。

この二人は、いずれも国木田独歩の『武蔵野』（明34・3）から入った詩人。描かれた自然は、在来の花鳥風月の自然ではない。いきいきと生動し、林の静寂にみちた空間に「永遠の呼吸」が感じられる自然であった。みずみずしい感受性、また、そのリズムカルな口語文体などが、後続する自然主義文学の自然描写を先取りするものであった。この二人が『武蔵野』から出発したことは重い。

明治三十七年九月、蛇笏は自然主義文学の牙城であ

った早稲田の英文科（当時、国文科はない）に入学する。牧水のほうが一年上であった。蛇笏が新体詩や小説から文学に入ったことは、よく知られている。このこともまた、いつそう自然主義を理解する契機となる。

蛇笏は「歳月ながるる事の迅さ」（「創作」昭3・11）で、牧水を悼みながら、その交友を次のように追懐する。

牧水君が山吹町の宿に居た頃がいちばん来往のはげしかった時だつたと思ふ。私はやはり発句で、君は短歌だつたが、話はいつも創作についてはなし合ふことが多かつた。或る日、ひよこり君が戸塚の私の宿へ尋ねて来て、いゝところを俺が見つけたから行かないかといつて誘ふので、一緒に出かけて行つてみると、其処は緩い傾斜の松林で、稚松の間に、穂をそゞけたつた芒が疎らにとび生えてゐて、秋日影が万遍なく林を照らしてゐた。からつとした青い空の下に、早稲田の田舎村が遠く見渡せた。何でも目白台近傍の林の中だつたらうとおもふ。

この一文は、さらに枯草に寝そべったり、また起きては、話しながら歩いたことが記される。いかに牧水が武蔵野の自然を愛していたかということ、蛇笏との親交ぶりを明らかにする。

蛇笏が投宿していた戸塚（弁天町）の霞北館に、明治三十九年九月から翌年二月まで、牧水が移転してきた時期がある。蛇笏の短編小説「林垆」（「文庫」明40・6）は、同宿していた牧水と目白から落合の丘陵を歩いた、その自然描写が中心となっていた。蛇笏の回想と通じあうものであり、独歩の『武蔵野』を、みずからの手で消化しようとしたものであろう。

私は花袋のものは嫌いじゃなくって、作品を集めたけれども、私はやはり国木田独歩のほうにより強い関心をもちましたね。ですから独歩の作品というものは、どんな零細なものでも集めて持っていますよ。

これは、昭和三四年七月の楠本憲吉司会による座談会「俳句一筋―わが道を語る」における蛇笏の発言である。「花袋の『蒲団』などは好きじゃない」とも言い、独歩の『運命』（明39・3）を熟読したことにもふれる。このことは、蛇笏が終始独歩に関心をしめしたことをもの語る。

この座談会に同席した息子の龍太は「独歩のようなロマンティックなリアリズム」を指摘する。「多分に後期自然主義なんだ。これはだいたい前に中村草田男さんが書いていたけれども、蛇笏はロマンティック・リアリズムと言っているが、この見解は当たっている」として、独歩からの影響に言及する。むしろ「そ



飯 田 蛇 笏
(山梨県立文学館提供)

の後における随筆なんかは独歩的なものが目覚めて
いるしね、より以上俳句作品には、自分の願って
いたものが豊富に出ている。だからロマンティックな
ものが初期にはかなり濃厚だし、『山廬集』とか『山
響集』などはリアリズムがからみ合っている」と述
べて、蛇笏の自然主義が、独歩よりの浪漫的抒情の
流れをくみながら、鋭い直感で人生の一断面を捉え
るリアリズムであることを検証したのである。
ところで、独歩への心酔をうながした牧水である
が、蛇笏はこの牧水にたいして、的確な批評を見せ
ていたことにふれておきたい。蛇笏は「若山牧水の
最後の詩作たる俳句」(『雲母』昭4・2)のなかで、
牧水の『別離』(明43・5)の短歌を取りあげる。

髪ながく垂れて額の蒼を掩ふ無言よ君にくちづ
けてあむ
秋の白晝風呂にひたりて疲れたる身はおもふな
り女のことを
よるべなき生命生命のさびしさの満てる世界に
われも生くなり



「雲 母」 昭和4年2月号
(山梨県立文学館提供)

一首目は、憂鬱な心もちを詠んだもので、「無言」
を擬人化する。沈黙をつづける表情を、むしろ愛す
るといふ、屈折した発想。二首目は、昼の風呂に浸
りながらの類唐趣味。三首目は、孤独のさびしさに
生きる自分と、それは自分だけではないとする観念
的なもの。
こうした短歌を、蛇笏は認めようとしなかった。
それぞれ「調べの整ったもの」ではあるが、内容は
「多分の情熱を盛つた乱舞境を踏み破りきれない」と
した。ここに見られる過剰な表現にうなずいていな
い。
子ども手うちはやして泣上戸泣上戸とぞわれ
をめぐれる
たはむれのやうに握りし友の手の離しがたかり
友の眼を見る
それについて、これらは「性格的に彼を克明に
表現する」とする。一首目は、酒席で泣く自分を、
ひそかに嘲笑したものであり、二首目は、かぎりな
い親愛の情を、隠さずに出したものである。

これらについて、蛇笏は「人間としての彼自身の
像を、露はに永久に築く所以のものである」とし、
さりげない日常の中から擷んだ「私」の確認に、あ
きらかに賛同する。こうした鑑識眼は、自然主義的
リアリズムの本質を心得たものであったと言わざる
をえない。
昭和三年九月一七日、牧水は肝硬変で亡くなる。
まだ四三歳の壮年であった。

その遺骨は、晩年の牧水が棲んだ沼津の千本松原、
その近くの乗運寺の墓地に納められる。

若山牧水の英霊を弔ふ
秋の昼一基の墓のかすみたる 蛇笏

昭和六年九月二四日には墓碑ができ、建碑供養が
おこなわれているから、それをイメージした句かと
思われる。

蛇笏は『山廬集』(昭和7・12)に、この一句を取
める。立ちこめた秋の白い霧につつまれながら、早
大時代からの友人であった牧水を悼む。

これについて、龍太は『若山牧水全集』第九卷(平
5・6)の月報「伝聞の牧水」で、蛇笏の思い入れ
を解いている。「遠い青春の憶い出を秘めつつ、いま
は天上のひととなった故友への無言のまばたき感
じられる。その墓所ははるかな秋雲の彼方。熱情波
瀾の生涯をおもえば、いまはまだ安き眠りを、と思
うばかりである」とした。たしかに詞書の「英霊」
といった語彙にも、親しい同世代者の死を思いやっ
た、はかない心情がうかがわれる。蛇笏が詠んだ一
句には、ともに消え失せていくような空しさが滲む。
さらに蛇笏は、その直後に前出の「若山牧水の最



山 廬 集
(山梨県立文学館提供)

後の詩作たる俳句」を執筆し、二人の長年にわたる交友を懐かしむ。

つれづれや天上をはふ百足の子 牧水
秋の夜やのそのそと人の入りて来つ 牧水

亡くなる三日前の一四日の作、すでに重態に陥っていた。最後に詠んだのは短歌ではなく、中学時代に詠んでいた俳句であった。

蛇笏はこの遺作に注目する。ここに「人間が歩んでゆく心のすがた」を見出し、ゆきついた「人心の尊さを讀へ残さう」としていた。超然といのちを詠み据えたところに、みずからと相通ずるものがあつたからであろうか。

筆者プロフィール しの ひろし 歌人、評論家。昭和八年東京に生まれ、早稲田大学在学中に「まひる野」の会員となる。土岐善麿・窪田章一郎に師事。卒業後小学館に入社。現代人の日常を多角的に歌うなど、先進性と良識に輝く作風は、厳しい時代認識と実証性に貫かれた論と一体となり、高く評価される。短歌史家、短歌評論家として精力的に活動する。歌集には『昨日の絵』、『百科全書派』、『至福の旅びと』。評論は『近代短歌史―無名社』、『近代短歌論争史』、『篠弘歌論集』等。半田良平賞、短歌研究賞、現代短歌大賞、逕空賞等受賞。八五年には博士号も授与されている。現代歌人協会理事長。

第七回若山牧水賞に 三枝昂之氏の歌集『農鳥』

宮崎県、宮崎県教育委員会、宮崎日日新聞、延岡市、東郷町の共催による第七回「若山牧水賞」の受賞作品は、三枝昂之氏の『農鳥』（なごらみ書房刊）に決まった。

授賞式は二月十三日(木)、宮崎市の宮崎観光ホテルで行われ、選考委員の一人である佐佐木幸綱氏による「牧水と酒」と題する記念講演があった。受賞者三枝氏の記念講演は「楽しむ牧水」という演題で、翌十四日に東郷町で行われた。

三枝昂之氏は、昭和十九年甲府市に生まれ、早稲田大学卒業後、同人誌「反指定」、歌誌「かりん」を経て、平成四年に「りとむ」を創刊。東京都立高校教諭の傍ら、作歌活動に精力的にとりこんでいる。



『農鳥』は、氏の故郷甲斐で春になって雪がゆるむとその姿を現すという農鳥岳に由来し、故郷や母への思いが歌集の名に込められているようだ。受賞に際して三枝氏が自選した十五首の中から七首を紹介する。

静かなる沖と思うに網打ちて海に光を生む男あり
まだ丘は樹木の奥に霧がある私はまれにふくろうとなる
甲斐は峽にして貝の国はるばると舌がよろこぶ煮貝のあわび

叙事がそのまま述志でもあり鼓舞である明治軍歌は日本晴れなり
桃咲いて甲斐天領のほのあかり母の視界もゆるぶであらう
東国は早苗の季節水の季節水のむこうに水がひろがる

立ち直るために瓦礫を人は掘る 広島でも長崎でもニューヨークでも

氏の歌集には『やさしき志士達の世界』『水の覇権』『地の燠』『甲州百日』等があり、評論集には『現代定型論』『正岡子規からの手紙』等がある。なお、『水の覇権』で第二十二回「現代短歌協会賞」、『甲州百日』で第三回「寺山修司短歌賞」を受賞している。

中学生短歌コンクール特選作品

— 日常の生活の中の感動をこそ —

十三年度(第十二回)特選作品

ハンセンの病氣を知った海人展びっくりもしたかな
しみもした 第一中一年 岡本 晶子
夏座敷よちよち歩く赤ちゃん屋敷のわたしを目標
にして 長井崎中二年 勝又 愛未
梅干しに口をすぼませふと思う今なき祖母がなつか
しきかな 門池中二年 飯田 真彩
礼をして静かにはずす面とこて一本とりたい焦りと
戦う 第五中二年 鈴木 実花

君と似た観音像と目が合つておもわずそで動けな
くなる 愛鷹中三年 伊藤 昌美
長電話いつもおしゃべりとまらない母のしせんがわ
たしにささる 第四中一年 増田 未沙
「ありがとう」たった一言言いたかつたもうかなわな
い父への思い 第五中二年 古屋 千里

妙心寺天井にやどる墨の龍その下にいる我は小さき
座禅して心を開き音を聞く小さな音もしつかり届く
愛鷹中三年 石川 珠美
愛鷹中三年 原田 祐輔
盆の夕迎え火たけば浮かびくる祖母の笑顔とひびの
ぬくもり 第二中三年 赤池 裕平

ごめんさいこの一言が言えなくて母の背中につぶ
やいてみる 第五中三年 古屋 千里

十四年度(第十三回)特選作品

「ごめんね」と言えずに過ぎた次の日は何か心の距
離を感じる 第二中三年 青山 智裕
飴や菓子たくさん買った格子屋の忘れられないばあ
ちゃん笑顔 第一中三年 三枝 昭文
ありんこが僕のおとしたのだあめにたかつて黒いあ
め玉になる 金岡中二年 水口 翔平

「ふざけるな」裏切つた友に言う言葉言つた自分がな
ぜか悲しい 金岡中二年 郷治 光
川下りサル家族が川岸に船の進みを見守っている
門池中三年 山本 郁子
祖母の手に包まれている私の手手の中にある旅のお
守り 門池中三年 井川 知恵

ゴミ箱に変わってしまった海の中宝石箱にはいつも
どれるの? 大岡中二年 山本 千裕
富士山の下で僕らは生きている僕らはみんな輝いて
いる 大平中二年 中村 晃之
秋の空真つ赤に燃える太陽に犬も止まった散歩の帰
り 静浦中二年 細川 裕充

当コンクールの選には、(社)沼津牧水会役員の青木
朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一が
当つたが、二年間の特選の歌を並べてみて、「会話」
の入った歌が多かつたことに気づく。より具体的に
なる利点からのものだろうが、この形に安易に寄り
掛かることのないように警戒したい。

選歌を終わって気づいたことは、取材の範囲が狭



ということ。部活動・修学旅行・高原教室・夏祭
りの花火等々。正直に言って、これらを題材とする
作品からは当たり前感想しか汲み取れず、秀作に
出会うことは稀であつた。ごく一般的な感想になつ
てしまうからである。もつと日常の生活の中から
浮き上がってくる感動なり、哀感・不安など揺れ動く
心を捉えられないものかと思つたりした。逆にこの
状況が現在の中学生の現実かとの思いもある。だか
らこそ、なおのこと、生活の現実からの作品を欲し
いと思つた。

今年の静岡県短歌大会の学生の部の大賞の歌「ぶ
かりぶかり息苦しくて空を見るたぶんわたしは溺れ
るサカナ」は、高校生の作品だが、この詩情を期待
するのは過酷なのであろうか。(須永 秀生)

直島の牧水歌碑

社団法人沼津牧水会理事長

林 茂 樹
(千本山乘蓮寺住職)

瀬戸内海の小島「直島」(香川県の浜辺に牧水の歌碑があると知ったのは昨年夏のことであった。直島出身の大学時代の友人河野健氏から知らされた。「若山牧水全集」が発行されたとき直ちに購入したほどの牧水ファンである。

河野「牧水全集を見ていて、牧水が直島で詠んだ歌をみつけた。」

林「歌碑がないのは残念だ。」

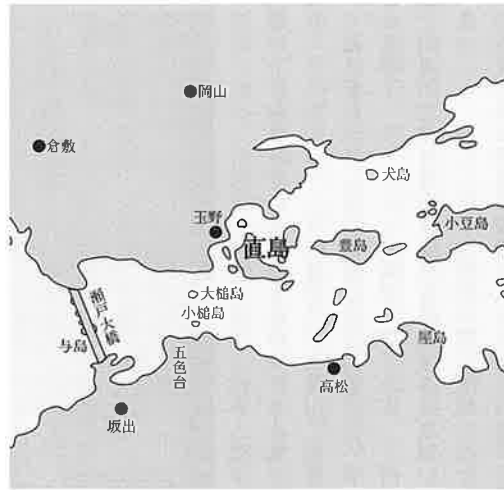
河野「直島町史に、牧水歌碑の写真が載っている。琴弾の浜にあるようだ。」

林「まさか！牧水の歌碑については大悟法さんと榎本さんそれに東郷町でも調べ上げてあり、漏れはないはずだ。もしあるとしたら、大発見だ！」

興奮を抑えきれず、直島町役場へ問い合わせると確かに牧水の歌碑はあった。わざわざ撮影して送ってくれた写真を見ると、立派な歌碑であり、側面には、永井荷風訳の「ボードレールの詩」も刻まれている。写真で見ると「ボードレールの詩」は判然としないが、「短歌」は牧水の直筆に間違いはない。いつ建てられたのだろうか。

歌碑建立の経緯を尋ねると、牧水は鯛網見物が目的で大正十年五月十九日に、この島を訪れているが、その案内役であった神官三宅其部の長男三宅親連氏が町長時代の昭和五十一年に建てられたものだと

いう。「広報なおしま」(同年八月号)には三宅氏自身が書いた歌碑紹介記事が載っており、歌碑にされた牧水直筆の短歌は画帳に即興で書かれたもので、三宅家に大事に保存されているともいう。



いてもたってもいられなくなり、直島訪問を決意する。河野氏に伝えられると、道案内を申し出られる。直島在住の片岡健夫氏(河野氏の令兄)は、歌碑に刻まれた短歌の原本所蔵者(三宅親連氏夫人)を訪問され、原本を撮影して送ってください。

送られてきた写真には「ボードレールの詩」の短冊もある。見て驚愕する。画帳に書かれた「短歌」

は無論のこと、「ボードレールの詩」も牧水の直筆に間違いはない。

牧水が愛誦していたと伝えられる「ボードレールの詩」については、昨年三月に出版された岩波文庫『新編みなかみ紀行』の解説で、編者の池内紀氏もふれている。池内紀氏とは昨年一月、同文庫の編集に際して当記念館を来訪されたとき以来、親しくさせていただいております。不思議な縁を覚える。

なお、「ボードレールの詩」は、「悪の華」のうちの「旅」の一節で、永井荷風が「あめりか物語」の題詞に用いたものである。(河野氏は「悪の華」の「旅」について、原典に当るなど詳細に調べてくれる。)

何としても牧水歌碑と牧水の直筆を見たいとの思いを胸に直島を訪ねた。昨年十月十一日のことである。大澤敏夫氏(沼津市教育委員会文化振興課長)が同行してくれる。

午前九時過ぎ、河野氏と三島駅で落ち合い、新幹線で岡山駅まで行き、宇野線で宇野駅(宇野市)へ。午後二時二十五分発の船に乗り、直島へ直行した。

片岡氏が港へ出迎えに来てくださっており、同氏の運転する車で三宅家を訪問する。当初は多忙で面会困難といわれていた三宅夫人は、片岡氏のおかげで気持よく「画帳」と「短冊」を見せてくださり、原本撮影の申し出にも快く応じてくださる。

「原本」をまのあたりに見て、あらためて感激する。牧水の直筆に間違いなし。

興奮冷めやらぬ面持ちでいたとき、三宅夫人から「この短冊等については新聞に載っていますよ」と昭和四十二年の中国新聞のコピーをさり気なく見せら



直島の牧水歌碑 (左から筆者、河野氏、片岡氏)

れる。「即興の短歌」と「ボードレールの詩」等の牧水直筆が直島にあることが、新聞に発表済みだ。
「歌碑についての記事もここにありませんよ」と昭和五十五年の四国新聞のコピーも見せられる。牧水直筆の短歌等の存在ばかりか、歌碑の存在さえも既に新聞に発表されていたのかと愕然とする。
気を取り直して三宅夫人を囲んで記念撮影をした後、三宅家を辞して町役場を訪問し、夕方五時過ぎに歌碑を訪れた。
素晴らしい歌碑である。夕陽に映えて実に美しい。周囲の環境も素晴らしい。全国に二六〇余基もある牧水歌碑の中でも出色のものだ。何故かその存在を知らずに亡くなられた牧水の長男旅人氏や牧水の高弟大悟法利雄氏にも見せてあげたかったと痛感する。

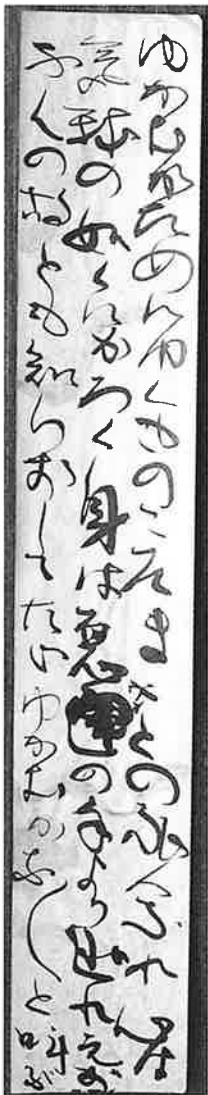
その夜は、河野氏と片岡氏そして大澤氏と四人、それぞれの思いに興奮を覚えつつ乾杯する。
河野氏ご兄弟の温かい心遣いに感謝しながら、大澤氏と深夜まで地酒を痛飲する。
翌十二日は午前中、崇徳上皇の遺跡やベネッセコーポレーションの施設(直島文化村)など島内を案内していただいた後、再び牧水歌碑を訪れた。前日はまた違った風情を見せてくれる。

ところで、直島の歌碑に刻まれている歌は、
ことひきの濱の松風静けしと聞けば沖辺を
雨過ぐるなり
大正十年春 牧水
である。即興で詠んで、三宅其部の画帳に書いてあげたものだ。

この歌は、『随筆集『樹木とその葉』の「若葉の頃と旅」には、「琴弾の濱の松かぜ断えぬると見れば沖邊を雨のゆくなり」として載せられている。

歌碑の側面に刻まれた永井荷風訳の「ボードレールの詩」は、牧水の直筆で短冊に書かれている。

ゆかむがためにゆくものこそ まことの旅人なれ
心は気球の如くにかろく 身は悪運の手より逃れえず
なんの故とも知らずして たゞゆかむかなくと叫ぶ

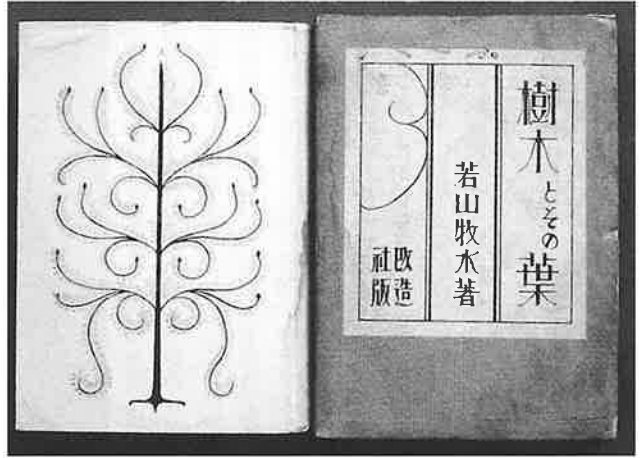


『あめりか物語』の題詞では、次のとおりである。
唯だ行かんが爲めに行かんとするものこそ、
眞個の旅人なれ。心は気球の如くに軽く、身は悪運の手より逃れ得ず、如何なる故とも知らずして、常に唯だ、行かん哉、行かん哉と叫ぶ。
(旅——ボードレール)

三宅家には歌碑にされた歌のほかに、牧水が即興で詠んだ未発表の短歌の短冊が二枚あった。
曳船の一つらならびゆくさまのしづけき沖のけふの雨かな
まどさきにさしいでて青き老松の茂れるかげに高松のみゆ

一首目は昭和四十二年に中国新聞で紹介済みだが、二首目は未紹介である。

なお、牧水は、鯛網見物について、『樹木とその葉』の「島三題 その二」に、次のように書いている。
私は瀬戸内海の島に渡つて行つたことがある。備前の宇野港から数里の沖合に在る直島といふのへ。
夏の初、やゝもう時季は過ぎてゐたがそれでもまだ附近の内海では盛んに名物の鯛がとれてゐた。その鯛網見物にと、岡山の友人I君から誘



はれて二人して出懸けたのであった。直島附近は最もよく鯛漁のあるところと云はれてゐるのださうだ。

附近に並んでゐる幾つかの島と同じく、直島も小さな島であつた。名を忘れたが、島の主都に当る某村に郷社があり、其処の神官M氏をI君は知つてゐた。そして網の周旋を頼むためにこゝんもりと樹木の茂つた神社の下の古びた邸にM氏を訪ねて行つた。

M氏は矮癩(わいれん)顔(がん)髪(かみ)の半白(はんぱく)な、元氣(げんき)のいゝ老人(らうじん)であつた。そして私は同氏によつてその島が崇徳上皇配流(すむねかみ)の旧蹟(きよせき)で、附近の島のうちでも最も古

くから開けてゐた事、現にM家自身既に十何代とか此処に神官を続けて来てゐる事等を聞いた。文中の「I君」は伊勢崎海花(歌人、神官)、「M氏」は八幡神社の神官三宅其部である。牧水は三宅其部の案内を受けて、保元の乱(一一五六年)に敗れてこの島へ配流された崇徳上皇の遺跡を訪ねたのち、「琴弾の浜」で鯛網見物を楽しんだ。

浜の松の蔭では忽ちに賑やかな酒もりが開かれた。うしほに、煮附に、刺身に、塩焼に、二疋の鯛は手速くも料理されたのである。

いつか夕方の網までその酒は続いた。そしてたゞ酔うた漁師達の網にどうしたしやれ者か、三疋の鯛がかゝつて来た。よれつもつれつ、我等三人は一疋づつその鯛を背負うて、島の背をなす尾根づたひの路を二里ばかりも歩いた。歩いてゐるうちに月が出た。折しも十五夜の満月であつた。峠から見る右の海左の海、どこの海にも影を引いて数多の島が浮んでゐた。斯くて今朝早朝に発動船で着いた船着場とは違つた今一つの港に着いて、其処から一艘の小舟を雇ひ、漕ぎに漕がせて宇野港へ帰りついたのは夜もよほど更けてゐた。可哀相に、其処まで送つて来てくれたM老人は其処からまた島まで一人で帰るのであつた。

「琴弾の浜」は、崇徳上皇が琴を弾いて配流の身を慰めたと伝えられることから名付けられた美しい浜で、現在はこの地を琴反地と呼んでゐる。

直島の牧水歌碑は「新発見」ではなかつた。しかし、「ボードレールの詩」が牧水に愛誦されていたこ

とを実感することができた。

「ボードレールの詩」が刻まれている「直島の牧水歌碑」は貴重である。広く知ってもらいたい。

注1 大悟(だご)法利(ほふり)雄氏(ゆうし) 牧水高弟。牧水研究家として知られ、牧水に関する著書多数。「牧水歌碑めぐり」(短歌新聞社 昭和五十九年)の著者。当記念館初代館長。平成二年十一月二十三日逝去。満九十一歳。

注2 榎本(えのもと)尚美(なほみ)氏(し) 牧水長子(なかつと)旅人(りょじん)氏の長女(ながむすめ)榎本(えのもと)童子(どうじ)氏(し) (当記念館館長)の夫。「若山牧水歌碑インデックス」(自費出版 平成八年)の著者。医師。

注3 牧水(まきみづ)の生誕地(宮崎県東臼杵郡東郷町)の生家が保存されており、その隣に牧水長子旅人氏の設計した「牧水記念館」(昭和四十二年十一月三日開館)がある。平成四年に「牧水サミット」を開催。その記念事業として同年「若山牧水 全国歌碑集」を発行。

注4 三宅(みやけ)親連(ちかづね)氏(し) 昭和三十四年から平成七年まで九期連続(りつづき)町長(まちぢやう)。八幡神社(やわた)神主(かみ)。平成十一年二月二十二日逝去。満九十一歳。

注5 『中国新聞』岡山版に、昭和四十二年八月八日から九月十日にかけて掲載された「吉備路の牧水」に、直島(なほ)のことが詳しく紹介されている。筆者(しやうじん)の塩田(しほ)啓(けい)一(いち)氏は昭和四年岡山県笠岡市(かさおか)生れ。歌人。執筆(しやくしん)当時(たうじ)岡山県立(おかやま)井原(いはら)高校(こうがく)教諭(きょうゆん)。

注6 なお、本稿(ほんこう)執筆(しやくしん)に当り、「吉備路の牧水」を参考にさせていただいたことを付記する。

注7 大正十四年刊。「若山牧水全集」第十二卷(増進会出版社 平成五年)所収。

注8 明治四十一年刊。「荷風全集」第三卷(岩波書店 昭和三十八年)所収。